

紅い花

(二) 赤久の仕事

琉 紅

(二) 美久の仕事

日は沈み満月が登つたが、空一面に雲が被り、あたりは暗闇となる。

島の南端には集落があり、大木に囲まれた屋敷の戸板の隙間から、女性の叫び声が漏れて聞こえてきた。闇夜に乗じた魔物が、獲物を探して唸り声をあげているかのようだ。

そこから垣間見えるのは、医者らしき老人の前に、三十代とおぼしき女性が両手、両足を縄で大黒柱に縛られていた。彼女の両目は真っ黒に凹み、ほお骨が目立つ。暴れたのだろうか、縄には血が付いていた。その柱を取り囮み、女の親族らしき者が四、五人首をうなだれ座っていた。

一様に皆、表情が硬い。

老医は、

「カマドは、腹が痛い、頭が割れる様に痛い、と言つて苦しんでいる。その上、海に入り毒蛇いちらぶを探し求め、自ら噉まれて死のうとした」

後ろに座している家長は、溜息をついた。
「どうにか、ならんか。わざわざ本島から医師であるそなたを呼び寄せたのに」

「……」

「氣は狂つておらぬ。彷徨さまよつてゐるだけじや。まだ救える」老女が、黙り込んでゐる老医の代わりに、言葉に希望を込めた。

その老女は島の祭司、『祝女』と呼ばれた。手の施し様が無くなつた老医と変わることになつた。島で最高の神人だつた。

「悪靈だ、狂人だ、と話は聞いておる……」

と、カマドに目をやる。

「夫が漁に出てゐる間、他の男と交わりをもつたのじや。それを、他のヌルたちが陰で噂し、広めたゆえ、その視線を苦しんでおるのであらう。心の病じや」

ヌルは、手慣れた様子でススキの葉を三本束ねて結び、手に塩水を降りかけながら、カマドの肩を軽く撫でていく。憑依したかのようすに左右に揺れながら、神を称える歌（ているる）を奏で、同時に話しかけるが、カマドは首を激しく振りそれらを拒絶した。

「内から、出ん……このままで、本当に狂つてしまふのう」ヌルの歌声も、次第に力ないものとなつていく。

一刻が過ぎ、ヌルは冷や汗をかき、疲れきつた顔に変わつ

た。

自分でも手が付けられないということを感じ取り、しばらく考え込んだ。

内側に赤、外は白の紺、少女から発せられる純粹な霸気がそれらをまぶしく輝かせていた。

髪を結い、銀のかんざしを仕上げに差し込む。さらには、白の帯を頭に巻き、蔓草にクバの葉を飾り付ける。

最後に、そそくさと一人で神鏡をのぞき込み、額に一つ赤い紅を指先で着けた。母親の手渡そうとする朱色の箱は、手で押し返した。

屋敷の中心をなす重苦しい居間で、皆は壁を背にしていた。

音もたてずに、すっと入ってきた少女をヌルは見るや、力マドに目を向け視線で指示した。

「美久は、香炉、ロウソク、天へとつながる七つ橋の木々も使わんのじや。何故なのか」

とヌルは渋い顔をする。

吐き気を催す匂いが充满する中、美久は表情一つ変えず、柱に縛られたカマドの前に座った。

カマドからの視線は美久の目、深淵を探し続けた。

しばらく、二人の間に激しい気のやり取りがあつた。唯一、ヌルにそれが伝わったのか軽く身震いした。

やがてカマドの目から僅かな瞬きが発せられ、美久は言葉を返した。

「力になります。私の名は美久」

「誰でもよい、カマドを助けてくれ。もし、その者で良くならなかつたら、私の娘は一体どうなるんだ」

僅かに雲が薄れ、その月明かりの下、人影が一つ、屋敷の裏口から急ぎ足で入つてきた。昼間、浜辺で花の木片を拾つた少女だつだ。

呼び出した母親は、奥の部屋で風呂敷に包んだ荷物を広げ、娘の身支度を急いだ。

カマドの吐血で汚れた服の上から、右肩を躊躇もせずに触れた。するとビクッと両目が大きく見開く。

「ほつといて。わたしは、死にたいの」

美久は目をそらさず頷く。カマドは、

「あの人は、別の女がいるのよ。今度帰つてくる時には、その子供を連れて来ると言つていたわ。きっと女も一緒よ。私はどうなるの！　その女、呪い殺してやる」

ヌルの口が、突然開いた。

「気が狂つておる」

しばらく沈黙がその場を支配した。美久は慈悲であふれる眼差しを向けた。

(この人の心の悲しみを感じる)

「あなたがこれまで夫に為に尽くしてきたことは、誰もが、そして神様をもご存知です。漁で傷ついて帰つてきた時、優しく薬を塗つたり、また元気で海へ出てほしいと願つて作った食事、やさしさは伝わっています」

「あなた、神を見たことあるの」と、ゆつくりカマドは答えた。

「……いいえ、でも、知つていいの。この島の周りには沢山の神様がいて、外から形を変えて、私たちを見守ってくれているの。本当よ」

側にいたヌルが、不思議そうに美久の顔を覗き見た。

神人として話す内容が突拍子もなかつたからだ。

カマドは、

「私は終わりよ！　もう壊れているの。休ませて。七つの橋から落ちて死んでいくの」

その言葉に美久の目がきらめいた。

「あなたの夫が連れて来る子は、ニライカナイの使者です。あなたの優しさ、愛の中で育てて欲しいと。これから幸せになれるのよ」

カマドの目に、彼女自身の優しさが戻つた。

「私は、別の男と交わりを持ちました。それは許されないことでしょう」

「人が魅力を感じ、供に惹かれあう。それは自然なことです。時には自分で抑えられなくなるものです。他のヌルたちが許さなくとも、私と、太陽の神々は許します。もう自分を許してください。……苦しい時、他にいい男を探そうとするのは当たり前。私だつたら同じことするわ」

「何をいう！」

途端、後ろにいたヌルは、大声を張り上げ美久を睨んだ。しかし、美久はその気迫の相手をしなかつた。

カマドも勢いよく柱に沿つたまま起き上がり、ヌルに目を

やり、美久を向いた。

美久は座つたまま下から彼女を見つめて決して離さない。

(あなたを助けたい、お願い、私の心に触れて)

美久の視線には、慈しみがあつた。

美久は、無言でカマドを抱きしめた。

毒による体の痛みと、心の苦しみを伴うカマドは、美久に触れ全てから解放された。

その意識は、美久の目を通して世界、そして宇宙へと引っ張られていく。

その宇宙とは美久の瞳の中であつた。

カマドは、そこに写つた自分の汚れきつた顔を見た。その顔を美久が布で奇麗に拭き取つてゐる。

カマドは、何か憑きものが離れたかのよう、少女のように激しく泣き崩れた。

美久はゆっくりと彼女の縄を解いた。

周りの家長、親族は身動きが取れなかつた。

カマドは美久の前で体を丸めた。咳をし続け、多量の毒が含まれた血を吐き出し、美久の着物は黒く染まつていく。美久が、カマドの背中を優しくさすり続けると二人の体は微妙に揺れ始めた。

美久の口先が僅かに動いた。周りの人人がわからない言葉だ

が、母なる神が憑依したような子守唄(ているる)に似ていた。

側にいるヌルは自然と両手を合わせた。

カマドは幸せそうな表情を浮かべては、美久の腕の中で静かになつた。

不思議とヌルの足に力が入り、立ち上がつた。そして、美久へと向かい、彼女の背中に手を当てた。

美久からカマドへと、許しを伝えるかのようにな。

つづく